

シイタケの栽培技術に関する研究 (Ⅱ)

一 被覆栽培による発生キノコの品質改善一

森食用菌じん研究所 佐藤 泰生・岡田 好敬
吉富 清志

1. はじめに

低温乾燥期にキノコの保温と保湿を図り生長を促進させ厚肉物を採取すると共に、3～4月の気温上昇に伴うシイタケの一斉開傘と作業の輻輳を避けるために、芽切りのみられたホダ木に被覆材を被せる被覆栽培を行なったところ、良質のキノコが計画的に採取できたので報告する。また、今回用いた被覆材の保温、保湿性についても併せて検討を加えた。

2. 材料と方法

被覆材は商品名「ホダ木コート」を使用した。

a. 低温期の被覆栽培(クヌギ林内)

供試ホダ木はS53, 54年春に接種された春出品種を用い、12月上旬に2昼夜散水して芽切りの揃った1月上旬に被覆を行なった。

b. 温暖期の被覆栽培(スギ幼令林内)

供試ホダ木はS56年春に接種された春出品種を用い、12月上旬に1昼夜散水して芽切りの揃った2月中旬に被覆を行なった。

3. 結果

a. 低温期の被覆栽培

「ホダ木コート」で被覆された区(以下被覆区と呼ぶ)は、1～2月の寒冷期に春子全収量の約50%が採取されたのに対して、対照区は25%の採取率であった。3月の春子最盛期においても被覆区は3月中～下旬にかけて逐次採取されたのに対して、対照区は3月下旬に一斉開傘した(図-1)。

b. 温暖期の被覆栽培

被覆区の総発生量は、1㎡当り3,218個で対照区の4,499個に対して少ない発生数であったが、発生乾燥重量には大差なかった(表-1)。これは1個当りの乾燥重量の違いによるものであり、平均乾燥重量は対照区の2.2gに対して、被覆区では3.1gと大型厚肉のキノコであった。また、キノコの採取経過についてみるに対照区が最盛期の3月22日から24日の3日間に春子全体量の約70%が採取されたのに対して、被覆区は3月上旬からキノコが平均して採取されたため、春

子の最盛期に入る約1週間前まで全体量の約65%が採取された(図-2)。

c. 被覆材の保温・保湿性

「ホダ木コート」内の温湿度を自記記録計を用いて測定したところ、温度の日較差についてはホダ場内が9℃であったのに対して被覆内では5～6℃と比較的較差が小さく、「ホダ木コート」による保温効果が認められた。また、湿度の日較差については、ホダ場内が40%であったのに対し被覆内では10%程度であり、「ホダ木コート」による保湿効果が認められた。

4. 考察

以上のことから、「ホダ木コート」を使用した被覆栽培では次のことが明らかとなった。

寒冷期に用いると、季節風を防ぐので乾燥によるキノコの生長不良が少なく、生長に必要な温湿度が得られ易く、更に適度の通気性を有するので過湿とならず充実したキノコが得られる。また、この時期に被覆することにより、キノコが生長しながらホダ木水分が減少し、いわゆる「抑制効果」があり、被覆を取り除いた後に十分に吸水操作を行なうと次回(温暖期)の発生が良好であった。

温暖期に使用した場合でも、その目的は十分に果たされ、品質のよいキノコを分散させて採取することができる。

ホダ場の条件としては、日射量の多い例えばクヌギ林等の落葉樹林のような明るい場所が適するものと思われる。これは、スギ林に比較して日射量の多い明るいホダ場ほど採取期の分散が大きく、より良質なキノコが計画的に採取できているからである。したがって、被覆栽培を行なう場合は以上のような条件を満たすホダ場を選定する必要があり、スギ林あるいは日射量の少ない暗いホダ場で被覆材を使用する場合は、秋～初冬にかけてホダ場の改善が必要と思われる。

引用文献

- (1) 吉富清志・佐藤泰生：日林九支研論 35, 211～212, 1982

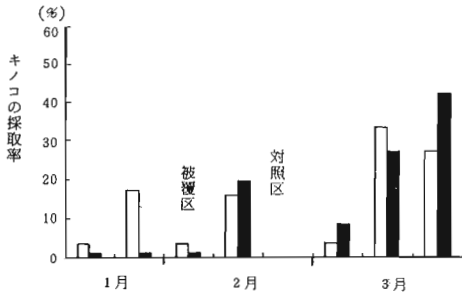


図-1 ホダ木コート用いた被覆栽培(クヌギ林)

表-1 被覆栽培における春子の採取経過と収量と形質

処理区	発生個数	総乾重量	1個重	歩留
ホダ木コート	3,218 [♂]	9,902 [♀]	3.1 [♀]	16.1%
対照区	4,490	9,731	2.2	14.9

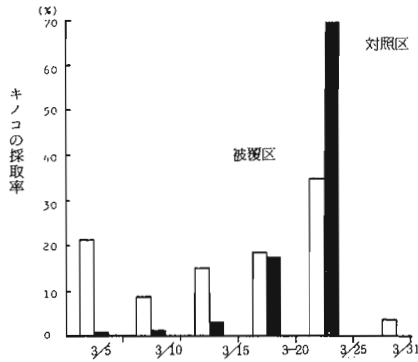


図-2 ホダ木コートを用いた被覆栽培

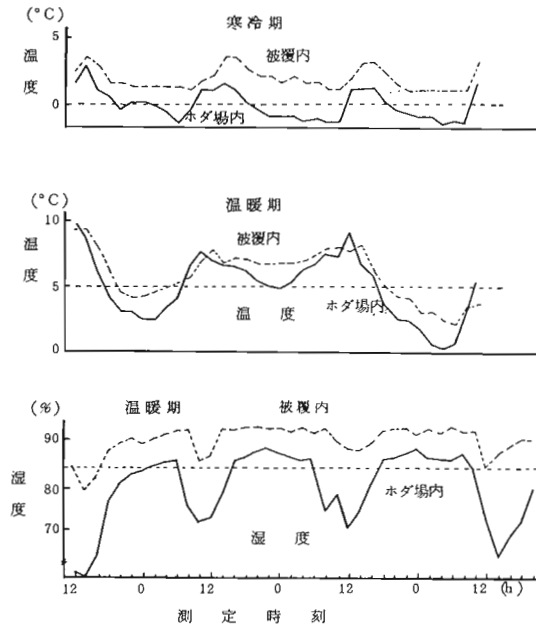


図-3 ホダ木コート内の温湿度の変化